

# 令和4年度事業実施結果報告書 《技術の検証・情報提供及び普及》

事業名称：こどもの里自立援助ホーム・  
若者等居場所地域交流支援事業

補助事業者：認定NPO法人こどもの里

令和6年1月

# 0. 提案の概要

## ①提案事業の目的

関係性の貧困から生まれる虐待、貧困の連鎖、引きこもり、不登校問題、野宿者襲撃、また、制度の狭間におかれる若者の支援、特に若年層の女子に対する支援のニーズ増大などの課題を、地域で解決していかななくてはならない。

釜ヶ崎という地域の持つ力を生かして、個々の関係性を回復させ、それぞれが自己肯定感をもって自らの人生を選び、歩んでいくための一歩を踏み出せる場を創出する。

## ②提案事業の内容

### ●住宅等の整備

- ・1階：地域交流、相談の場：路上生活者・生活困窮者の様々な生活相談に対応
- ・2階：研修会やフィールドワーク（それに伴う宿泊機能を完備）、支援会議、若者の居場所等に活用
- ・3階～4階：女子自立援助ホームを開設。  
15歳～概ね22歳までの若者に生活の場を提供し、自立を支援する。
- ・屋上：簡単な運動や癒しの場、交流の場として活用。

### ●技術の検証

- ①職員向けスキルアップ研修
- ②利用者向けエンパワメント研修
- ③施設管理・マネジメント研修及び事例等検討会

### ●情報提供及び普及

- ①内覧会（見学会）の実施
- ②パンフレットの作成

# 1. 技術の検証 (1) 職員向けスキルアップ研修

## ① 検証の目的・問題意識

各職員がトラウマケア等の専門的な知識やスキルを身につけ、向上させることで、利用者に対してよりの確かなケア及び養育を実施することに寄与することを検証する。

## ② 仮説の設定

虐待や面前DV等による影響を受け、様々なトラウマ課題を抱える青年達が利用することが想定される。トラウマケアの専門家による研修を実施し、各職員が利用者の抱える課題への理解を深め、必要な援助スキルを身につけることで、より適切なケアを行うことができる。

# 1. 技術の検証 (1) 職員向けスキルアップ研修

## ③検証方法

- ・ 検証方法：アンケート調査  
研修前後で参加者にアンケートを実施した。

- ・ 調査サンプル数：累計：55

- ・ 調査実施期間：2023年5月～11月

### \* 実施内容

- ・ 実施回数：計5回
- ・ 講師：NPO法人レジリエンス代表 中島幸子氏

### <研修テーマと参加人数>

- 第1回2023年5月18日「トラウマの基本(前編)」 9名
- 第2回2023年7月14日「トラウマの基本(後編)」 9名
- 第3回2023年9月8日「トラウマ支援に必要なアタッチメント」 8名
- 第4回2023年10月13日「解離について」 9名
- 第5回2023年11月16日「トラウマと解離」 8名

※各回の研修において「境界線」「職員のセルフケア」についての内容を含んだ。

# 1. 技術の検証 (1) 職員向けスキルアップ研修

## ④検証の結果\_1

<アンケート結果①> ※アンケート集計結果より一部抜粋  
・全5回の研修内容に関して、「知識の理解度」「援助スキルの習得度」「日常の支援の中で実践できるかどうか」の3つの観点からアンケートを実施した。

\* 研修前と研修後の変化

項目	研修前	研修後
知識の理解度	78%	100%
援助スキルの習得度	49%	89%
日常の支援の中での実践	20%	100%

# 1. 技術の検証 (1) 職員向けスキルアップ研修

## ④検証の結果\_2

<アンケート結果②>

\* 参加者の感想 (研修後アンケート「自由記述」箇所より、一部抜粋)

- ・ 講師から具体的に今までの経験談を聞くことができたことで、実践していくときに役に立つと感じた。
- ・ グレーゾーンでの対応が大切・重要と知り、今後の対応に繋がられると思う。
- ・ こどもや若者たちと接する時にその子の生きづらさや難しさの理由がトラウマや境界線や愛着や解離という多角的な視点が持て、また、その視点が広がったことで、相手をより良く理解できるようになったと思う。
- ・ アタッチメントのタイプによって境界線のひきかたを調整していくこと、またその時に「罪悪感を持たない事」というのは、非常に重要な視点だと思った。現場で入居者に接する時にも意識するようになった。
- ・ 研修中に自分自身のセルフケアを具体的に考えることができた。自分にあった自分だけのセルフケア方法を紙に書いてまとめて、実践してみた。
- ・ セルフケア・境界線のひき方について、日々の中で意識できるようになった。
- ・ 解離についての映画がととてもよかった。こどもたちの行動の理由、背景に思いをめぐらすことがよりできるようになったと思う。

# 1. 技術の検証 (1) 職員向けスキルアップ研修

## ④ 検証の結果\_3

### \* 検証結果まとめ

- ・ 研修前と研修後を比較した時に、すべての項目で割合が高くなっていた。
- ・ 今回の研修が支援従事者にとってトラウマケアに関する理解を深め、援助スキルを習得し、それを日常の支援で生かしていくことに対して、非常に効果的だったといえる。
- ・ 現場の実践における課題や困難さの改善について、それぞれの参加者が効果を実感できていた。
- ・ 多くの参加者が、座学での知識のみならず、日々の実践の中で実際に生かせるスキルを身につけることができた。
- ・ 参加者がトラウマケアとそれに含まれるアタッチメント、境界線、解離、支援者のセルフケアに関して、幅広い視点で柔軟性のある援助方法を身につけることに繋がった。

# 1. 技術の検証 (2) 利用者向けエンパワメント研修

## ① 検証の目的・問題意識

利用者自身がそれぞれが本来持っている力が引き出されることで自尊感情が育まれ、自信を持って自分の人生を歩んでいけることを目指し、それに対するエンパワメントプログラムの有効性を検証する。

## ② 仮説の設定

当事者自身が本来持っている力が引き出されることを「エンパワメント」と呼ぶ。利用者向けのエンパワメントプログラムやワークを専門家等によって実施することで、利用者自身が自分の中に元々持っていた力の存在に気づき、自己尊重の念や自己肯定感を持つことに繋がり、自信をもって人生を歩み、社会に出ていくための助けとなる。

# 1. 技術の検証 (2) 利用者向けエンパワメント研修

## ③検証方法

- ・ 調査方法：ヒアリング調査
- ・ 調査実施期間：2023年12月～2024年1月
- ・ サンプル数：参加者へのヒアリング：3
- ・ 「共有の時間」での講師へのヒアリング：2

### \* 実施内容

- ・ 実施日：2023年12月15日
- ・ テーマ：「四つの窓ワークショップ」
- ・ 講師（ファシリテーター）：北野真由美氏、大谷真砂子氏
- ・ 参加人数：3名

# 1. 技術の検証 (2) 利用者向けエンパワメント研修

## ④検証の結果\_1

### \* ヒアリング調査内容

#### 1) 参加者ヒアリングまとめ

- ・どの参加者も、「楽しかった。」「また参加したい。」という感想をもっており、はじめは緊張していたようだが、プログラムに参加する中で雰囲気打ち解け、楽しい時間を過ごせたことが伺えた。また、プログラム内容が取り組みやすいものだと分かり、安心できたようであった。ファシリテーターに対しても好意的な印象を持ったことが伺えた。

#### 2) 講師ヒアリング結果まとめ

- ・全員が初めての参加であり、緊張感があったものの、様々なテーマで話が盛り上がり、楽しみながら参加していた。
- ・自身の家庭環境のしんどさを語ったメンバーもいた。
- ・尋ねられた事について伝えることはできたが、逆に“自分は自分”という境界線がゆるく、個人的なことなのか／このことは話さなくても良いプライベートなことなのかを自分の中で整理できるかについて、今後取り組んでいきたい。

# 1. 技術の検証 (2) 利用者向けエンパワメント研修

## ④ 検証の結果\_2

### \* 検証結果まとめ

期間内の実施は1回のみとなったため、直接的な効果を図ることは難しかった。しかし参加者それぞれがプログラム自体に好意的な印象を持っていたことが伺えたので、今後継続してプログラムを開催していくことで、エンパワメントプログラムの有効性が更に実証されて行くことは大いに期待できる。

今後もファシリテーターの協力を得ながら、エンパワメントプログラムを定期的 to 実施し、参加者の自尊感情が育まれるような機会と場をつくっていききたい。

# 1. 技術の検証 (3) 施設管理・リスクマネジメント研修

## ① 検証の目的・問題意識

職員が施設管理・リスクマネジメント等の研修を受けることで、より安定した施設運営が可能となることを検証する。

## ② 仮説の設定

職員間で施設管理やリスクマネジメント等への認識を統一しておかなければ、ソフト面・ハード面共に安定した事業運営が困難となる。研修を通して先行事例などから学ぶことで、様々なリスクを想定しながら施設運営を行うことができるようになる。

# 1. 技術の検証 (3) 施設管理・リスクマネジメント研修

## ③検証方法

- ・ 調査方法：アンケート調査
  - ・ 調査実施期間：2023年12月～2024年1月
  - ・ サンプル数：5
- \* 実施内容
- ・ 実施日：2023年12月12日
  - ・ 研修テーマ「リスクマネジメント研修」
  - ・ 講師：あらの家／ミモザの家 浜田進士氏
  - ・ 参加者：9名

# 1. 技術の検証 (3) 施設管理・リスクマネジメント研修

## ④検証の結果\_1

<アンケート結果>

参加者の感想（研修後アンケートより、一部抜粋）

### ①研修の感想

- ・入居時のこどものインテイクをできるだけ丁寧にするのと同様に、現在住んでいる子への説明もきちんとしておかないとトラブルの原因になるというのはきちんとしていかないといけない所だと思った。
- ・ケースを抱え込まないよう、普段から相談先を増やしておくことが大事だと思った。
- ・様々なリスクがあるという事を知っておくのと知らないのとでは、全然受け入れ方が違うので色々な実例を聴けて良かったと思う。

### ②自分の現場で生かせそうなこと

- ・施設のミッションを職員間で共有すること。
- ・児相としっかり連携すること。
- ・医療機関、特に産婦人科との連携をつくっておくこと。
- ・職員のバーンアウト防止が施設マネジメントの重要な要素の一つだと感じた。職員のケアを重視し、職員向けの心理士の配置などを検討できればと思った。

# 1. 技術の検証 (3) 施設管理・リスクマネジメント研修

## ④検証の結果\_2

### \* 検証結果まとめ

自立援助ホームの具体的なケース事例や現場での支援の実践例が多く含まれた研修内容であったため、どの参加者も自身の現場に生かせるポイントを見出すことができていた。

うまくいったケースだけでなく、うまくいかなかったケース事例についても研修内で取り扱われたことで、今後自分たちの施設運営で注意すべきポイントや、リスクにどのように備えるかにおいて様々な示唆が与えられ、非常に効果的な研修であったといえる。

当初、予定していた地域内での実施検討会は実施できなかったものの、今後、地域内で支援者同士の連携を深めていき、事例検討会を実施していく方向性である。

## 2. 情報提供及び普及

### ①情報提供及び普及内容

#### 1) 内覧会（見学会）の実施：

- ・ 行政機関や地域内外の関係機関及び支援団体を招待し、当事業の説明会及び施設の内覧会を実施した。
- ・ 若者の交流、相談、および生活の場を兼ね備えた一体的な居場所及び自立支援の拠点を目指して当事業を新たに開設したことを、地域内外問わずできるだけ多くの人たちに周知した。

#### 2) パンフレットの作成

- ・ 当事業の概要を記したパンフレットを作成し、利用希望者や相談者、当施設への寄付者及び見学者等に配布した。
- ・ 各行政機関や地域の支援団体にも配布し、設置を依頼した。
- ・ 利用を希望する若者たちや自立支援に携わる関係機関に、当施設の理念や在り方を提示し、若者が安心して自立を目指すための場であることを理解してもらうことにつながった。

## 2. 情報提供及び普及

### ②事業効果

#### 1) 内覧会（見学会）の実施内容

第1回：2023年 9月2日 参加者数53名

第2回：2023年10月2日 参加者数39名

参加者数合計：92名

- ・事業効果：多くの参加者があり、本事業を地域に広く発信することができた。またそれぞれの参加者同士の情報共有と今後の連携を深める重要な機会となった。

#### 2) パンフレット作成の実施内容

- ・発行部数累計：3500部
- ・配布先：施設利用希望者及びその他相談者、大阪市こども相談センター各担当窓口、西成区役所子育て支援室、要保護児童対策協議会メンバー、わが町にしなり子育てネット加盟団体、その他地域の関係機関及び支援団体、視察受け入れ団体 等
- ・事業効果：利用希望者や見学者等にこの事業を簡潔かつ視覚的に分かりやすく説明するために非常に効果的であったといえる。

### 3. 総括

建物全体の建築の工期自体が大幅に遅れ、それによって入居者受け入れも遅れたため、技術の検証・検討に関して当初予定していた計画よりも開催回数を少なくせざるを得なかったものもあった。  
しかしそれぞれの研修やプログラムは参加者にとって非常に有益であった。

特に、職員スキルアップ研修でのトラウマケアに関する学びは、それぞれの職員が日々の実践で早速取り組んだり、ケース検討において研修で得た学びを生かしながら利用者をより深く理解することに繋がっている。利用者エンパワメント向け研修は引き続き開催していく予定であり、プログラムを継続していくことで更に効果が期待できる。  
リスクマネジメント研修は、今後の施設運営に非常に参考となった。関係機関との連携を強めたり、インテークをより丁寧におこなう取り組みにつながっている。

検証期間終了後も、それぞれの現場の課題に対応した研修の企画やプログラムの実施を積極的におこなっていくことで、利用者や支援従事者にとってより良い場づくり・環境づくりを引き続き目指していきたい。